

西部戦線の comradeship — P. J. Campbell の大戦回顧録

高橋章夫

I : Comradeship とは何か

2008年の2月、桂冠詩人アンドリュー・モーション (Andrew Motion) は、第一次世界大戦中に西部戦線で塹壕戦を体験した最後の生存者であったハリー・パッチ (Harry Patch) に捧げる詩、“The Five Acts of Harry Patch”を發表した。その中に次のような一節がある。“[T]he liking among comrades which is truly / deep and wide as love without that particular name” (ll.32–33)。「愛情と同様、真に深く広い戦友同士の愛着」とは、戦友同士の絆の強さ、つまりは comradeship を表現したものである。この詩は、パッチの自伝、*The Last Fighting Tommy* を基にしたものであるのだが、上述のモーションの表現とパッチの自伝中での記述の間には微妙な差異がある。パッチはルイスガン部隊の仲間が戦死したことについて、次のように言う。

My reaction was terrible; it was losing a part of my life. I'd taken an absolute liking to the men in the team, you could say almost love. You could talk to them about anything and everything. I mean, those boys were with you night and day, you shared everything with them and you talked about everything. We each knew where the others came from, and what their lives had been, even where they were educated [...]. It is a difficult thing to describe, the friendship between us. (111)

パッチの「私はチームの皆と絶対的な愛着を感じていた」という記述を基に、モーションはこの「表現するのが難しい友情」を表現しているようである。共に戦争を経験し、死んでいった仲間を、単に“friends”と表現するのでは、彼らの絆を表すには意味が弱いためモーションは、“comrades”という単語を選んだのであろう。では逆に、なぜパッチは“comradeship”ではなく“friendship”と言ったのか。そしてこの両者の間にはどのような違いがあるのだろうか。

フレデリック・マニング (Frederic Manning) の小説、*Her Privates We* に両者をはっきり区別している箇所がある。この小説は、マニング自身の従軍経験が色濃く反映されたものであり、主人公ボーン (Bourne) は、将校として相応しい教養があるにも関わらず、兵卒という地位に拘り昇進を断り続ける。そのようなボーンに対し、彼が信頼する従軍司祭は「兵卒たちの中には君の友達はいないだろう」と言う。それに対しボーンは次のように答える。

“I don't suppose I have anyone whom I can call a friend [...]. [I]n some ways, you know, good comradeship takes the place of friendship. It is different; it has its own loyalties and affections; and I am not so sure that it does not rise on occasion to an intensity of feeling which friendship never touches [...]. I have seen a man risking himself for another more than once; [...]. It seems to be a spontaneous and irreflective action, like the kind of start forward you make instinctively when you see a child playing in a street turn and run suddenly almost under a car. [...]. At one moment a particular man may be nothing at all to you, and the next minute you will go through hell for him. No, it is not friendship. The man doesn't matter so much, it's a kind of impersonal emotion, a kind of enthusiasm, in the old sense of the word.” (79—80)

ボーンは、comradeship とは enthusiasm の古い意味、つまり神が憑依して起こる熱狂の一種と看做す。その中では個人のアイデンティティは喪失することになり、自由意思に基づく個人間の交流である friendship とは大きく異なるものと捉えている。サラ・コール (Sarah Cole) はこのボーンの定義を一步進め、friendship と comradeship の違いは、個人を維持する世界と、人間が戦争という貪欲な機械の餌食になる世界との違いであると論じている (145)。Comradeship という熱狂に支配された兵士たちは、単に仲間の兵士というだけで、見知らぬ他人を救うために自らの命を犠牲にすることを厭わない。その行為によって失われた人員は再び補充される。その繰り返しの中で、comradeship を構成する兵士個人は戦争を継続するための歯車になり、個人同士の結びつきである friendship は、破壊されることになる、というわけである。

このように friendship と comradeship を定義することにより、パッチが friendship を選んだ理由が明らかになる。純粋な comradeship においては、それを構成する兵士が死ぬと、新たに別の兵士が補充されるに過ぎない。Comradeship という熱狂に身を投じることにより個々の命の価値は低く見積られる。それ故 comrades の死は悲嘆すべきものではなく、自己犠牲の精神を称賛、美化すべきものである。そうではなくパッチは、自分とは異なる他者として認識している friends の死を嘆いているのである。Comradeship への陶醉は戦争体験に肯定的な意味を付与することになるが、一度その熱狂から覚めると、アイデンティティの喪失、そして friends の死が前景化することとなる。しばしば friendship の上位に位置するものと看做される comradeship ではあるが、コールの定義は comradeship の持つ多義性・曖昧性を回避する有効な手段である。

以降、II 章では P. J. キャンベル (P. J. Campbell) の描く comradeship と friendship を、III 章では戦後の comradeship の様相を、さらに IV 章で comradeship によって構築された兵士像とそれに対する反発を分析していく。

II : Campbell の描く comradeship

砲兵隊の下級将校として西部戦線に従軍したキャンベルは、*In the Cannon's Mouth* と、*The Ebb and Flow of Battle* (以下それぞれ *CM*、*EF* と略記)、二冊の従軍回顧録を出版した。*CM* にはフランスに渡った 1917 年 5 月から 1917 年 12 月までの、*EF* には 1918 年 1 月から 1918 年 11 月までの従軍体験が描かれている。両作品には、長期間に渡る他の将校との友情、確執といった人間関係が生き生きと描かれている。例えばセシル (Cecil) との関係は以下の通りである。彼はキャンベルと同様、最前線に赴いた経験が無かったため他の将校から馬鹿にされるのだが、議論になると同じ立場のキャンベルを擁護してくれる (*CM* 28)。その後セシルは昇進し、他の中隊への異動が決まる。既に最前線を経験したキャンベルは、セシルの友情を以前ほど必要としなくなったと言い、彼がいなくなることを他の将校と一緒に喜ぶ (*CM* 51)。キャンベルの中隊に戻ったセシルは、元中隊長としての権威を振りかざすことなく対等に付き合ってくれたことにより、彼に好意を持つようになる (*EF* 71)。再び中隊長になったセシルは、自己中心的で部下を大切にせず、犬のことだけを気に掛けるようになり、キャンベルは彼のことを嫌悪する (*EF* 73, 88)。しかしキャンベルが体調を崩した際、優しく接してくれた彼に再び好感を持つ (*EF* 94)。そして厳しいながらも役立つ助言を与えてくれるセシルのことを以前に増し好きになる (*EF* 142)。その後二人は休戦まで良好な関係を維持する。キャンベルが描いているのは、このような濃密な人間関係の中で孤独な一少年が一人前の将校に成長するまでの過程である。他の多くの従軍回顧録では、他の兵士と親しい関係になっても、負傷による本国送還、他の隊への異動、そして戦死のため、結局は短期間の付き合いに終わる場合が殆どである。キャンベルが、緊密かつ継続的な人間関係を描けたのは、彼の属していた砲兵中隊は他の中隊と比べ死亡率が低く (*CM* 137)、さらには将校の異動の殆どが 4 つの砲兵中隊の間だけで行われていたという比較的恵まれた環境のためである。

このように、キャンベルと他の将校とを結び付けているものは *friendship* と看做することができるのだが、部下の下士官兵とは *comradeship* で結ばれていたと言える。次の引用は、砲弾が飛び交う中、部下の下士官兵と塹壕の補強をする場面の描写である。

For the first time in my life I, a boy from a Public School, was doing manual work beside men who were manual workers. In a flash of revelation, [...] I saw that instead of my being superior to them they were superior to me. But I saw something else, that it did not matter which of us was better, what mattered was that we were working together against a common enemy, the shells that were bumping and banging in the darkness on the other side of our sandbag wall, together we were making the place stronger, so that they should not hurt us. (CM 41)

「共通の敵」から命を守ることが最優先であり、そこでは階級差は意味を持たず、キャンベルは下士官兵たちの集団の一部と化す。このような *comradeship* による階級の解消は、前線で従軍した下級将校たちの回顧録に広く描かれている。ハロルド・マクミラン (Harold Macmillan) は「自分の隊の部下たちと密接にかかわって働く日々の生活の中で、他の方法では接触することができなかったあらゆる階級の男たちと話をし、共にくつろぐ方法が初めてわかった」(100) と言い、チャールズ・カリントン (Charles Carrington) は「塹壕での生活の中で、もっとも満足できる瞬間は、階級による特権を主張することはできない状況で、部下たちと共に部隊ごと孤立したときであった」(220) と懐述している。概して、将校たちは前線における階級差の消滅を強く意識し、それを肯定的に捉える傾向がある。

しかし下士官兵たちは、必ずしも指揮を取る下級将校との間に

comradeshipを感じていたわけではい。例えばフランク・リチャーズ (Frank Richards) は、「新しい将校を判断する基準は塹壕でのふるまいであり、度胸がある将校は尊敬される」(98) と言い、その一方で、臆病な将校や、横柄な将校は容赦なく批判する (169)。また、マニングは「低い階級の兵士達と対等に話すことができるのは、非常に偉大な人物のみである」(149) と言う。多くの下士官兵は、臆病な将校を見下し、勇敢で思いやりのある将校に対しては賛辞を惜しまない。将校は部下の下士官兵を一つの集合体と看做しているのに対して、下士官兵は自分たちが仕える将校を自身とは異なる一個人として判断し、その上で信頼できる上官との間のみ comradeship の感覚を共有していた。さらには、将校に一人の人間としてではなく、集団として看做されることに反感を持つ下士官兵もいる。ジョン・ルーシー (John Lucy) は、将校たちの食事に招待された際、彼らが会話の中で所有格を使いすぎると言い、このような将校は、部下の下士官兵さえも所有物と看做していると憤っており (354)、下士官兵の立場から見れば、将校との階級差が消滅することは極めて稀であったように思える。

このような認識のずれを生み出す最大の理由は、一人の将校に対し多数の下士官兵が配属されるという軍隊の構造上のものであろう。キャンベルが「旅団には 30 人の将校がおり、1000 人の下士官兵 [...] がいた。私はその 30 人すべてを知っており、数人の高級将校を除き、皆と個人的に friendship の関係にあった」(EB 6) と述べていることからわかるように、他の将校とは個人的な人間関係を結ぶことが可能であっても、部下の下士官兵全員と、一対一の人間関係を築き上げることは物理的に不可能である。それに加え、将校の仕事である部下の手紙の検閲も、両者の認識のずれを生み出す一因となっている。マクミランや、シドニー・ロジャースン (Sidney Rogerson) は、部下の手紙の検閲を通して部下の素朴さに感動し (Macmillan 100, Rogerson 60)、ハーバート・リード (Hebert Read) は、毎日 2、300 通もの愛国心溢れる下士官兵の手紙を検閲する作業にうんざり

すると漏らす (*Contrary Experience* 108)。ジェイ・ウィンター (Jay Winter) が指摘しているように、下士官兵が本国に送る手紙は、検閲を受ける前提で書かれているのであり、さらには家族に心配をかけないようにとの配慮もあり、兵士たちの本心を吐露しているものとは言い難い (*Remembering* 110)。¹⁾ その上、当然ながら下士官兵が将校の手紙を見る機会はない。従って将校が手紙の検閲を通して下士官兵の心境を知るとするのは、予め出来上がっている理想的兵士像を一方向的に再確認する作業に過ぎない。同様に、将校が comradeship によってもたらされたと感じている一体感も一方向的なものである可能性がある。

キャンベルもまた、部下の下士官兵を個別に描写することは殆どなく、彼らを一つの集団と看做し、その集団の一部として彼らと対等な立場で同じ作業をすることにより一体感、つまりは comradeship を実感し満足する。Comradeship という熱狂は、危険な環境に置かれるほど強烈なものになり、逆に安全な状況では弱くなる。キャンベルは、前線から離れ、比較的 안전한環境下では、部下との間にある距離を意識せざるをえない。

[G]enerally when I was alone on a job I would spend a part of the night at any rate in their company. They would move up when I went in, making room for me to sit down among them, but then go on with whatever they were doing, as though I was not there. (*EF* 85)

キャンベルは、他の将校との間の感情の交流を生き生きと描いている半面、殆どの下士官兵には名前すら与えていない。彼らを集団として扱い、尊敬、憐み、そして comradeship といった一方向的な感情は抱くものの、friendship に発展することはない。しかし一方向的な感情のため、対立関係になることもない。他の将校とは決定的な仲違いをし、彼の心をかき乱すこ

ともあるのだが、comradeship で結ばれている部下との関係は非個人的なものであるために、常に安定したものとして描かれている。

III : Comradeship の瓦解と再生

休戦後、comradeship はどのような変遷を遂げたのだろうか。「私は私自身を大隊と同一視していた」(226) と言い、comradeship を強く意識していたガイ・チャップマン (Guy Chapman) は休戦後のことを、次のように振り返る。

Looking back at those firm ranks as they marched into billets, to the Fusiliers' march, I found that this body of men had become so much part of me that its disintegration would tear away something I cared for more dearly than I could have believed. I was it, and it was I. (276)

たとえ休戦時まで comradeship を維持することができた場合も、隊の解体、そして除隊に伴い、その母体を失うことは避けられない。そして除隊後、本国に戻った兵士は comradeship という価値観を持たずに戦時中を過ごしていた民間人たちを目の当たりにすることとなる。

Hurrah for "civvy life." But is it Hurrah? I don't think so, not now I've had some [...]. I often wonder to myself what sort of life some of these men would have lived out there during the four years of killing? Would they have shared their fags and parcels as we did, would they have shared their last franc as with a pal as we did? [...]. I can only say "they would not." (Coward 173)

カワードは、comradeship のない世界で暮らしてきた民間人との間にできた価値観のずれを知ることになり幻滅し、怒りを露にする。大戦に勝利したイギリスではあるが、この戦争がもたらした莫大な人的、経済的損失に見合うだけの見返りは得られず、大戦の意義が疑問視されるようになった。ドイツ軍に侵攻、占領されたフランスとは異なり、イギリスは直接的な危機に晒されていたわけではない。²⁾ 仮にイギリスの大戦への参戦が無意味なものであったならば、兵士たちが前線で味わった苦難も、犠牲も、さらには彼らが成し遂げたことも無意味で無価値なものになる。それを避けるため、戦争体験によってもたらされた comradeship という価値観を帰還兵たちは死守しようとする。

Class barriers were largely broken down and comradeship became a real and unforgettable thing. [...] [I]f “Toc H”, or any other movement, succeeds in transplanting in peace-time soil the noblest of the spiritual products of the war, it will not have been fought in vain. (Carey and Scott p.261)

Toc H は、1915 年、ベルギーに設立されたあらゆる階級の兵士のための休憩所であり、そこでは階級差を主張せず、皆と平等に交流しなくてはならないという規則があった。戦後、帰還兵たちによって再編され、現在では世界中に支部を持つ。Toc H を、元兵士によって設立された中で最も成功した組織の一つであると看做す向きもあるが (Snape 219)、それでも政治運動の主流にはなり得なかった。ケアリーとスコットは大戦の意義を、そして自分たちの従軍経験の意義を、戦後の comradeship の再生に見出そうとしたのだが、概ね失敗に終わったと言ってよかろう。

リードもまた、戦後 comradeship に幻滅した一人である。

It was perhaps always an illusion to think that the sense of unity and comradeship that had been forged in the heat of battle [...] could survive in days of peace. Losing this illusion these demobilized particles lost the basis for their political ideas. They may have thought of the unity and comradeship of battalion at the Front as a paradigm for the factory and the workshop. But [...] the same external pressure did not exist: the womb had no walls. Instead just an aimless centrifugal search for more space, for more comfort, for a “standard of living” [...]. The state itself increased its power, and the free individual, the Nietzschean Superman, disappeared like a chimera in the darkness. (*Contrary Experience* 67–68)

帰還兵たちが民間人として生きていくためには、comradeship は意味を持たない。戦後否応なしに銃後の社会の中に組み込まれることになった帰還兵は、他人ではなく自分自身の生活のことを考える必要があり、以前は軽蔑していた民間人の価値観に吸収されていく。また、comradeship に支配された兵士を、戦争という巨大な機構を動かす歯車と考えれば、兵士は超人などではなく、むしろニーチェの言う畜群であるとも言えるのだが、リードは、戦時中は comradeship という熱狂の持つディオニソスの側面を重視し、そこに過酷な運命に立ち向かって敗れ去る「悲劇的喜び」を見出すことすらあった。そして戦後の comradeship の運命は、ポピーの花を詠ったリードの詩の一節からも窺うことができる。

I have no power therefore have patience
 these flowers have no sweet scent
 no lustre in the petal no increase

from fertilizing flies and bees.

No seed they have no seed [...]. (“A Short Poem for Armistice Day”
ll.13–17)

戦後、イギリスでは休戦記念日にポピーの造花を胸につける習慣が広まっていた。最初はフランスで製造した造花を輸入していたのだが、1922年以降はイギリス国内で製造するようになり、失業対策として退役軍人がその製造に携わることになった。³⁾ 帰還兵への憐みの象徴として人工的・機械的にポピーの造花は増えていく。しかしそれにより、本物の花である兵士たちの苦しみが理解されることも解消されることもない。それでも退役軍人は生活のため、不毛な造花を作り続けるという不毛な作業を「忍耐強く」繰り返すしかない。comradeship についても同様である。戦時中の comradeship は、周囲の環境に反応して発生する熱狂であり、理念や政策といった思索の上で成立するものではない。Toc Hのように理念として友愛を掲げるのとは異なっている。人工的に量産される造花同様、戦後の comradeship は、戦時中の comradeship の模倣に過ぎない。リードは戦時中、戦争自体は憎んでいたのだが、comradeship には本物の価値があると看做していた。そのため戦争のない平時の comradeship は理想的なものになり得ると考えていた。しかし皮肉なことに、comradeship は兵士たちを取り巻く、戦場という危険な環境によって生み出され保護されてきたものであり、決して外部の人間と共有することのできない概念であった。そのため、周囲から孤立した危険な環境という「子宮の壁」が完全に消失した戦後の社会では存在できないものなのである。

ではキャンベルは戦後味わったであろう comradeship に対する幻滅に、どのように対処したのだろうか。彼は休戦時の心境を次のように言う。

The Last War in History! Well, even if I achieved nothing else in life

I had done something, I need not feel my life had been altogether wasted, I had played my part. (EF 166)

この回顧録が執筆された1970年代から振り返れば、第二次大戦、ベトナム戦争などが起こっており、「全ての戦争を終わらせるための戦争 (The War to End All Wars)」という標語の実現に失敗したことは周知の事実である。それにも拘らずキャンベルは「歴史上最最後の戦争」と言い放ち、それが誤っていたと弁明することはない。飽くまでも休戦時の視点からそれまでの従軍体験を振り返っており、執筆時の視点を介入させない。キャンベルは休戦後、オックスフォード大学に進み、数学者になったのだが、戦後の生活は全く描かず、大戦での経験がその後の彼の人生にどのような影響を及ぼしたかを知る由はない。不純物たる戦後社会の様相を物語から排除し、戦後多少なりとも味わったであろう幻滅を記述しない。キャンベルは、戦時中の体験を戦後の世界から完全に孤立させることによって「子宮の壁」を創造し、純粋な形で西部戦線を、そして comradeship を再構築しようと試みているのである。

IV: Comradeship の排他性

Comradeship は、孤立した危険な状況に置かれるほど強くなり、その構成要素である兵士個人のアイデンティティを奪い、均質化する。その一方で comradeship を共有できない外部の人間に対して排他的になる性質を持つ。外部の人間というのは、銃後の民間人のみを指すわけではない。⁴⁾H. S. クラパム (H. S. Clapham) は、「我々の師団は他のどの師団よりも休暇が少なく、我々の大隊は我々の師団の中の他のどの大隊よりも休暇が少なかった」(171) と言い、自身の従軍経験の厳しさを強調する。それにより、他の大隊、他の師団の兵士の体験は、彼の体験を希釈したものに過ぎないと看做しているようにすら思える。さらに4年間西部戦線で歩兵部隊の下士官兵と

して従軍してきたリチャーズは、楽な任務に就いていた兵士を辛辣に非難する。彼は休戦記念日のパレードを見て次のような感想を漏らす。

[T]here are some on parade to-day wearing war-medals on their breasts as if to say that they have been in action—but the only action they were ever in was with some of the charming damsels in the Red Lamps behind the Front and down at the Base where they served. (323)

リチャーズの場合、comrades であると認める基準が非常に厳しく、その基準に満たない他の多くの兵士を批判する。彼は、いかに危険で辛い任務に、いかに長期間就いていたか、そしてその中でどれだけ勇敢に振舞ったかによって他の兵士を評価している。そしてその基準に達している者を「本物の兵士 (Pukka Solider)」と称し他の兵士との差別化を図る。このように、長期間危険で困難な任務を勇敢にこなした者こそが「本物の兵士」であると言う価値観が根強くあり、そのため元兵士は、自分の任務が他の兵士と比べいかに困難で危険であったかを主張する傾向がある。そして歩兵たちが共通して見下し、時には目の敵にしていたのが砲兵である。相対的に見れば、砲兵の任務の方が安全で容易であり、その上大砲の精度の悪さと歩兵部隊との連携の不備のため、味方の砲撃により歩兵部隊が損害を受けることも珍しいことではなかった。例えば、歩兵部隊の将校であった D. W. J. カドフォード (D. W. J. Cuddeford) は、度々味方の砲撃に苦しめられた (47, 73, 140)。彼は両軍の砲兵隊がお互いの歩兵を攻撃する「砲撃対決 (artillery duel)」を憎み、「歩兵対歩兵で、戦争をやり通すことはできる。しかし他の部隊は、歩兵の助けなしでは、戦いに決着をつけることができない」(99) と言い、歩兵以外を、とりわけ砲兵を見下す。

ドイツ軍の春季攻勢 (Spring Offensive) の際、歩兵部隊の大尉と出会っ

たキャンベルは、「おかしな戦争だ (It's a funny war)」と言う。これは、ドイツ軍の攻勢の前に、以前とは異なり、塹壕も砲撃もない場所をひたすら退却するだけの戦争に変容したことに對して言ったのであるが、その大尉は彼の言葉の意味を誤解する。

He looked at me, he saw my artillery badges, he was on foot, I was riding; he may have been the only survivor from his company. "It may be for you," he said, and *the sound of his voice still hurts after more than fifty years*, I hated his thinking that it had all been easy for us. (EF 48, italics mine)

「彼の声が50年以上経った今でも突き刺さる」と現在形で述べており、回顧録執筆当時のキャンベルの感情が顔を出す珍しい場面である。歩兵から見下されることに對し終始反発してきたキャンベルではあったが、戦後歩兵の味わった苦難を知り、罪の意識を感じていることを言わずにはいられなかったのだろうか。但しそれでも、休戦時に「歴史上最後の戦争」と言うのと同様、ここでもその直後に、当時の感情である歩兵部隊の大尉に対する憎しみを、過去形で率直に述べている。さらにキャンベルは、歩兵部隊の将校たちに砲兵隊の仕事を非難された際、「確かに砲兵は歩兵の困難を殆ど知らないが、それと同様に歩兵は砲兵の困難を殆ど知らないのだ」(EF 125)と反論し、歩兵より砲兵の方が楽で、能力が劣るという相対的な見方に反発し、両者の経験を比較不能なものとして捉える。

西部戦線に従軍したイギリス兵の回顧録として今日まで読み継がれてきたものは、主として歩兵部隊の下級将校によって執筆されたものである。イギリス陸軍の中で、歩兵部隊の、それも下級将校の死亡率が一番高く(Winter Great War 84-89)、彼らこそ「本物の兵士」であった。その結果、西部戦線で従軍したイギリス人の殆どが歩兵であったかのような印象すら受

ける。だが実際はイギリス陸軍の中で、歩兵の占める割合は、1914年の段でも54パーセントに過ぎなかった。その後技術の進歩に伴い、歩兵の占める重要度が減少し、1918年には32パーセントになり、非戦闘員の数をも下回るようになった（Beckett 113）。最も敵に近い場所で戦争を体験し、戦死者の数が圧倒的に多い歩兵に民間人の関心が集中するのは当然である。しかし逆に考えれば、生還した兵士の中では歩兵以外の任務に就いていた者の方が多いにもかかわらず、彼らが自分の体験を公にし、尚且つ人々の注目を集めるということは稀であった。

キャンベルの回顧録には戦死者の描写が殆どないことから、彼が従軍体験を美化しているのは明白である。この回顧録からは、兵士たちが回顧録を執筆する動機の一つであるとサミュエル・ハインズ（Samuel Hynes）が指摘している「戦場へのノスタルジア」（29）が強く感じられる。しかしキャンベルは、単に従軍経験を、そして comradeship を美化し、懐古しているのみではない。戦後大量に流通した「本物の兵士」たる歩兵の語る強烈な物語と比較すると、キャンベルの味わった苦難も喜びも色褪せて映るのは避けられない。自身の経験を絶対化し、自分たちを見下してきた歩兵たちの物語に反発し、彼らとは異なる物語を語ろうとする信念がキャンベルにはあったのではないか。他者の語る経験と比較することなく、飽くまでも自分自身の経験のみを絶対的なものとして語ることによってキャンベルは、独自の物語を語っているのである。

おわりに

歩兵部隊の下級将校が経験する comradeship は、下士官兵のアイデンティティを、そして歩兵部隊以外の兵士の言葉を剥奪した上で成立するものである。歩兵部隊の将校は、最も強烈に戦争を体験した者、つまりは「本物の兵士」の代表者と認識され、塹壕の兵士 / 本国の民間人という二項対立を揺ぎ無いものにしてきた。そしてその中間に位置する歩兵以外の兵士の、

或いは非戦闘員の声を剥奪してきた。キャンベルの回顧録を読もうとする読者は、ほぼ間違いなく、シーグフリード・サスン (Siegfried Sassoon) やブランデン (Edmund Blunden)、或いはカリントンら歩兵部隊の下級将校によって執筆された回顧録を既に読んでいるであろう。⁵⁾そして彼らこそが「本物の兵士」であるという先入観を持って読めば、上述の“the sound of his voice still hurts after more than fifty years”というキャンベルの言葉は、仲間を失った歩兵部隊の将校を、誤解であるとは言え傷つけてしまったことに対するキャンベルの後悔を表していると考えられる。しかし、彼が語っているのは、歩兵部隊の下級将校によって確立された「兵士の物語」に対する反論であることを考慮すれば、「50年以上経った今でも彼の言葉に怒りを感じている」と解釈できる。この回顧録は、単に従軍経験を理想化し、戦場に対するノスタルジアを綴ったものではない。戦時中、そして戦後、歩兵たちが特権的な地位を築き上げ、その中で砲兵隊将校としてのキャンベルの経験が周縁化された風潮に対する告発でもあるのだ。

注

本稿は、日本英文学会関西支部第3回大会（於・関西学院大学、2008年12月20日）における口頭発表原稿に加筆、修正を施したものである。

¹⁾ 様々な手法で検閲の目を掻い潜ろうと試みる兵士もいたようである。例えば Somme を some に変えるといった隠語を用いることによって、または手紙の一部に穴を開けることによって (Cuddeford 127-29)。

²⁾ 大戦の認識についての英仏の違いは Frank Field 著、*British and French Writers of the First World War*、Audoin-Rouzeau and Becker 著、*14-18*などを参照されたい。また、もしイギリスが参戦していなかったら、ドイツが第一次世界大戦に勝利し、それによって第二次世界大戦を経験することなく、今日の EU と同様の共同体が成立していたと示唆する歴史学者もいる (Ferguson 457-62)。

- 3) ポピーの輸入、製造の過程とイギリス社会における受容の様相は Adrian Gregory 著、“And Men Like Flowers Are Cut” に詳しい。
- 4) Frederic James Hodges のように、民間人の味わった苦しみを、異質なものとしながらも一定の理解を示した兵士も確かにいたが (221-22)、多くの兵士は銃後の民間人に、特に前線の現実を知らずにプロパガンダに染まった人々や、軍需産業に携わって富を築いた人々に嫌悪感を抱いていた (Cuddeford 221-22, Rogerson 31-32, Manning 151, Richards 244, Williamson 183)。
- 5) この三者の比較としては拙論、“The Making of a ‘Happy Warrior’” を参考されたい。

引用文献

- Audoin-Rouzeau, Stphane and Annette Becker. *14-18: Understanding the Great War*. Trans. Catherine Temerson. New York: Hill and Wang, 2002.
- Beckett, Ian. “The British Army, 1914-18: The Illusion of Change.” *Britain and the First World War*. Ed. John Turner. London: Unwin Hyman, 1988, 99-116.
- Campbell, P[atrick]. J[ames]. *The Ebb and Flow of Battle*. London: Hamish Hamilton, 1977.
- . *In the Cannon’s Mouth*. London: Hamish Hamilton, 1979.
- Carey, G. V. and H.S. Scott. *An Outline History of the Great War: For Use in School*. 1928. Cambridge: Cambridge UP, 1929.
- Carrington, Charles. *Soldier from the Wars Returning*. 1965. South Yorkshire: Anthony Mott, 2006.
- Chapman, Guy. *A Passionate Prodigality*. 1933. New York: Holt, Rinehart and Winston, 1966.
- Clapham, H. S. *Mud and Khaki*. London: Hutchinson, 1930.
- Cole, Sarah. *Modernism, Male Friendship, and the First World War*. Cambridge: Cambridge UP, 2003.

- Coward, George H. *Coward's War: An 'Old Contemptible's' View of the Great War*. Ed. Tim Machin. Leicester: Troubador, 2006.
- Cuddeford, D. W. J. *And All for What?: Some War Time Experiences*. London: Heath Cranton, 1933.
- Ferguson, Niall. *The Pity of War*. 1998. New York: Basic Books, 1999.
- Field, Frank. *British and French Writers of the First World War: Comparative Studies in Cultural History*. Cambridge: Cambridge UP, 1991.
- Gregory, Adrian. "And Men Like Flowers Are Cut." *The Silence of Memory: Armistice Day 1919–1946*. Oxford: Berg, 1994, 93–117.
- Hodges, Frederick James. *Men of 18 in 1918*. Ilfracombe: Arthur H. Stockwell, 1988.
- Hynes, Samuel. *The Soldiers' Tale: Bearing Witness to Modern War*. New York: Penguin, 1997.
- Lucy, J. F. *There's a Devil in the Drum*. 1938. East Sussex: The Naval & Military Press, 1993.
- Macmillan, Harold. *Winds of Change: 1914–1939*. London: Macmillan, 1966.
- Manning, Frederic. *Her Privates We*. 1929. London: Serpent's Tail, 1999.
- Motion, Andrew. "The Five Acts of Harry Patch." *Telegraph* 8 March 2008. <<http://www.telegraph.co.uk/culture/books/3671688/The-Five-Acts-of-Harry-Patch.html>>
- Patch, Harry and Richard van Emden. *The Last Fighting Tommy: The Life of Harry Patch, the Oldest Surviving Veteran of the Trenches*. London: Bloomsbury, 2007.
- Read, Herbert. *The Contrary Experience*. New York: Horizon, 1963.
- . "A Short Poem for Armistice Day." *Collected Poems*. London: Faber and Faber, 1966, 136–37.
- Richards, Frank. *Old Soldiers Never Die*. 1933. East Sussex: Naval & Military.

2001.

Rogerson, Sidney. *Twelve Days on the Somme: A Memoir of the Trenches, 1916.*

1933. London: Greenhill, 2006.

Snape, Michael Francis. *God and the British Soldier: Religion and the British Army in the First and Second World Wars.* London: Routledge, 2005.

Takahashi, Akio. “The Making of a ‘Happy Warrior’: Narratives of Charles Carrington and Other British Soldiers Who Fought on the Western Front.”

『中国四国英文学研究』第5号. 広島：日本英文学会中国四国支部，2009，37－51.

[[英文学研究 支部統合号』第1号. 313－327.]

Williamson, Benedict. *“Happy Days” in France and Flanders with the 47th and 49th Divisions.* London: Harding and More, 1921.

Winter, Jay, *The Great War and the British People.* 1986. London: Macmillan, 1987.

———. *Remembering War: The Great War between Memory and History in the Twentieth Century.* New Haven: Yale UP, 2006.